文学館の Web サイト調査をとおしたデジタル化の状況と課題

関根 颯香（筑波大学 情報学群）

宇陀 則彦（筑波大学 図書館情報メディア系）

概要：文学館は関東大震災や第二次世界大戦の影響により散逸した日本近代文学資料を収集，保存する施設として設立された．しかし，文学館は多様な機能を持つために，存在意義や位置づけが不明瞭な状態となっており，どのような目的で活動を行っているのかという点に着目した研究が必要とされている．また，文学館は所蔵資料の特殊性や孤立したシステムといった問題から，デジタル化による利活用について議論が見られず，デジタルの流れに取り残された形となっている．本研究では，デジタル分野の研究が進められている中で，全国文学館協議会に所属している文学館の活動から文学館の現状や課題を調査し，デジタル化について考察することを目的とする．

キーワード：文学館，文学資料，現状調査

Status and issues of digitalization through a survey of websites of Literary Museum

Sayaka Sekine (School of Informatics, University of Tsukuba)

Norihiko Uda (Institute of Library, Information and Media Science, University of Tsukuba)

Abstract: Literary Museum was established as a facility to collect and preserve modern Japanese literary materials that were scattered after the Great Kanto Earthquake and World War II. However, due to its diverse functions, the significance of its existence and its position are unclear, and the special nature of its collections and its isolated system have left it behind in the digital world. The purpose of this study is to investigate the status and issues of the literary museums belonging to the National Council of Literary Museums, and to discuss the digitalization of literary museums.

Keywords: Literary Museum, Literary Material, Survey of the present situation

１．はじめに

日本文学資料は古典から近代まで，長い時を超えて伝えられ，日々研究が進められている．特に古典籍資料は図書館や国文学研究資料館といった多くの機関が保存，収集，展示を行っている．しかしながら，近代の文学資料は関東大震災や第二次世界大戦の影響により，多くの資料が消失・散逸し，保存，収集，展示を行うことが困難となった．こうした現状から，散逸した日本近代文学資料を収集・保存する施設が必要とされ，文学館が設立された．文学館は，大きく分けて２つの理念によって活動が行われる施設となっている．１つ目は日本文学の文献・資料を対象として，収集，保管，閲覧，展示等の事業を行うこと，２つ目は作家が実際に暮らしていたゆかりの土地を保存することである． 文学館はこの２つの理念を実現するために，①図書館的機能，②博物館的機能，③文書館的機能[1]を有している．しかし，小国（2021）[2]の論文ではこの文学館の在り方について，文学館は「博物館でも図書館でもない，既存の施設とは一線を画する新たな一機関」と認識されているものの，研究者によって文学館の定義や視点が異なるために文学館の果たす機能の役割に関する整理は不十分な状態であり，文学館自体の位置づけを曖昧にしている要因となっていると指摘している．文学館は多様な機能を持つゆえに，研究対象として注目されにくく，文学館の存在意義や位置づけが不明瞭な状態となっている．そのため，各館が所蔵資料を通して，どのような目的で文学館の活動を行っているかという点について着目した研究が必要とされる．また，岡野（2008）の論文[1]でも述べられているように，文学館は所蔵資料の特殊性や孤立したシステムといった問題から，デジタル化による利活用について議論がみられず，デジタルの流れに取り残された形となっている．

そこで本研究では，デジタル分野の研究が進められている中で，全国文学館協議会[3]に所属している文学館の活動から文学館の現状や課題を把握し，デジタル化について考察することを目的とする．

２．文学館に関する先行研究

文学館に関する先行研究として，文学館の機能について論じた岡野と橋口の論文をとりあげる．岡野（2008）[1]の論文は，図書館情報学の視点から，文学館のオンライン検索について，当時の現状と課題を論じており，現在も続く文学館のデジタル化における課題を見出した先駆的な論文となっている．橋口（2022）[4]の論文では，文学館とアーカイブズの関係について，文学館の機能を

めぐる議論の動向について整理している．本研究では，この２つの論文を基に改めて文学館史と文学館研究史について整理するとともに，岡野の論文で言及されている文学館のデジタル化における問題点を挙げ，その意義について述べる．

まず，文学館史と文学館研究史について整理する．もともと文学者を主題とした記念館や日本近代文学資料に関する資料を収集・保存・公開する建物は戦前から存在していたが，現在のように「文学館」という概念で認知されている訳ではなかった．「文学館」という呼称が日本で初めて認知されるきっかけとなったのは，1967 年に開館した日本近代文学館である．日本近代文学館はそれまで個々に存在していた作家の記念館とは違い，日本近代文学資料を専門として総合的に扱う施設として誕生し，その後の文学館の在り方を決定づけた草分け的な存在となった．そしてその誕生を境に，文学館は 1960 年代から 1990 年代にかけて日本全国に建設されるようになり，急激に増加することとなった．だが，2000 年代になると新たな文学館を建設する動きは徐々に下火となり，現在では大小の規模を問うものでなければ全国に 700 館を越えるまでの文学館が存在することになったのである．このように，文学館は多くの種類を要するが，図書館や博物館とは違い，体系だった機能や特徴を持たず，個々の館が独自の活動を行う形で現在も運営が行われていることがわかる．

その後，文学館の活動をより活発に行うための意見交換の場として，1995 年に全国文学館協議会が発足し，文学館の機能を中心として研究がなされるようになった[5]．文学館の機能に関する研究が行われるようになった契機は，当時日本近代文学館理事長（現名誉会長）だった中村稔が文学館の機能として，文学資料や研究書などを収集・保存・整理して研究者といった限られた対象の閲覧に供する「図書館的機能」と所蔵資料を展示・公開し，広く公衆の閲覧へ供する「博物館的機能」を持つことに言及したことが挙げられる．この言及以降，多くの研究者が図書館的機能と博物館的機能の双方の視点を軸にした研究が行われるとともに，文学研究者の鳥羽耕史による生原稿の貴重文書を収蔵し管理する文書館的機能が提唱されるなど，多様な切り口から議論が重ねられたのである．

この機能に関する研究から，文学館の多様な在り方を示しただけではなく，その機能を活かす対象となっているのが，公衆よりも文学研究を行う研究者が中心となっており，文学館は設立した当初から広く公衆へと情報を公開するより，狭義の文学研究に役立つことを目的としていると読み取ることができる．

次に，文学館のデジタル化における問題点について説明する．冒頭でも述べたとおり，岡野は文学館史と文学館研究史を俯瞰的に調査したうえで，文学館のオンライン検索の現状と課題を整理している．ここでいうオンライン検索というのは，OPAC のことを指しており，論文が執筆された当時，オンライン検索を行っていた 12 館の文学館から，読み取れる問題点，文学館特有の取り組み，その後の展望にまで言及をしている．

なかでも，岡野が挙げた課題として所蔵資料の特殊性と孤立したシステムがあり，本研究の意義に触れる上で重要な示唆となるものである．

所蔵資料の特殊性は，文学館が取り扱う日本近代文学資料の形態に起因して挙げられたものである．文学資料は基本的に図書や雑誌といった図書館的資料だけではなく，直筆原稿や遺品といった一点ものを扱う博物館的資料や文書館的資料も存在している．そのため，文学資料をオンライン検索にデータとして加える際，図書や雑誌とは違う独自の形で提供していく必要がある．この特殊性により，現在もデジタル化した所蔵資料全体を検索対象とした情報公開が困難な状態となっているのである．

また，孤立したシステムとは文学館が提供するオンライン検索のシステムの在り方を指摘したものである．文学館のオンライン検索は岡野が論文を執筆していた当時から示唆されているように，各文学館が独自に作成したものであり，図書館や博物館のような横断検索は普及していない．そのため，全国に点在する形で保存された同一作家の資料を把握することが困難な状態となっている．

岡野が挙げたこの２つの課題は論文が執筆されて時間が経過した現在でもほとんど変化がみられず，類似する研究も中々進展がみられない状態となっている．加えて，前述した文学館の機能に関する研究の勢いも鈍化しており，文学館を対象とする研究はデジタル分野の研究が進められている時代において取り残された状態となっている．本研究はこうした現状にある文学館を現在のデジタル化の状況に照らして調査することで，今後の文学館の在り方を見直す契機となると考える．

３．研究方法

橋口の論文では，文学館の館数を調査したものとして，北海道立文学館初代館長をしていた木原直彦が調査した「全国文学館等一覧（2017 年改訂版）」の 745 館，図書館情報学の視点から文学館研究を提唱した岡野裕行が調査した「文学館一覧」の 763 館を挙げている．

しかし，ここで挙げられている調査は，大小の規模や活動内容による決まった文学館の定義に即して集計されている訳ではなく，各研究者の基準によって調査されたものである．そのため本研究では，一定の定義と会則によって加入を認められている文学館を調査するため，全国文学館協議

会に所属をしている文学館を対象とした．全国文学館協議会とは文学館の活動をより活発に行うための意見交換の場として，1995 年に設立された組織で，全 106 館が所属している．調査は全国文学館協議会に所属する各文学館が運営している Web サイトを基に，文学館の基本的な活動内容を把握するための基本的な情報を整理するとともに，文学館の現在の位置づけや求められている主要な活動を明瞭にするため，2 段階に分けて行った．

まず，1 段階目では文学館の基本的な活動内容を把握するための基本的な情報の整理として，文学館の設立年や運営団体，実際に行っているイベント，独自の活動を基に 17 個の項目を設定して Excel で表形式に手動でまとめ，調査を行った．調査項目は表 1 の通りである．

表 1　文学館の評価項目

	評価項目	評価内容
1	文学館名	全国文学館協議会に所属する館の名称
2	設立年	文学館の設立された年
3	運営団体	運営を行っている団体
4	学芸員の有無	文学の専門知識を持ち、文学館の職員として働いている学芸員の有無
5	団体・研究会	ボランティア活動や特定の作家を愛好し、独自の活動を行う団体の有無
6	館独自のHP	文学館が独自に作成、もしくは公開しているHPの有無
7	自治体のHP	県や市のHPの一部に、文学館の情報を公開する、またはイベントの情報を公開しているかの有無
8	SNS利用	SNSを利用した広報活動の有無
9	併設施設	館内にある併設施設
10	出版物	独自に発行している書籍や目録、紀要といった研究に使用できる刊行物の有無
11	データベース	収蔵資料についての詳細情報・所在情報を検索できる機能を持つデータベースの有無
12	デジタルアーカイブ	収蔵資料の詳細情報・所在情報を検索できる機能に加えて、デジタル化した資料を公開して利用出来るデジタルアーカイブの有無
13	館独自の取り組み	他の文化施設にはない、文学館独自のイベント内容
14	問い合わせ	専用のページ・項目・フォームを設置して、所蔵資料や施設のレファレンスに対応する問い合わせの有無
15	地域連携	地域住民や自治体の連携による企画やイベントの有無
16	文学館独自の賞	文学館が独自に企画・開催をしている賞の有無
17	備考	上記の項目以外に特記する内容

次に 2 段階目では文学館の現在の位置づけや主要な活動を明確化するために，1 段階目での調査結果と各文学館が設立時に掲げている設立理念や概要を基に表 2 の通り，6 つに目的の分類を行った．この分類は 1 段階目の調査でまとめた Excel の表形式に項目を追加する形で手動によりまとめ，調査を行った．

表 2　文学館の分類項目

	目的	分類内容
1	顕彰	その文学館が建つ土地や場所をゆかりとする作家の活動をたたえる。
2	研究	文学研究の研究センター的機能として、研究を進めるための「場」を作り、情報基盤・学術情報を提供する。または、文学館が収蔵資料、もしくは関係する作家・分野を対象として、文学館に所属する職員や研究員、学芸員が独自に研究を行い、内外にその成果を公表している。
3	教育普及	ゆかりの作家について普及する活動を行う。または児童・学生といった特定の年代を対象として文学の普及活動を行う。
4	生涯学習	特定の年代を問わず、文学に関する普及を行う。または絵画、コンクールといった生涯学習としての活動を主催し、文化創造の「場」としての機能を兼ね備えている。
5	観光地化	ゆかりの作家や文学館の建物自体が観光の対象となる。
6	街づくり	県や市が街全体をあげて街の象徴となるゆかりの作家や文学館の広報活動を行うことで、郷土愛の醸成や街の歴史・文化に触れる機会を作り、街づくりの根幹を担う。

全段階の調査を終了後，6 つの目的別に館数で集計を行い，結果を考察する．

4．結果

今回の調査で文学館の他館には見られない特徴や取り組み，機能が明確になっただけではなく，データベースやデジタルアーカイブを公開している館がいまだ限られ，他の文化施設よりもデジタルの分野から取り残されていることが改めて明らかとなった．

まず，1 段階目の調査でわかったことについて，表 1 の評価項目から文学館の「運営団体」，「デジタル上での活動」，「文学館独自の取り組み」の 3 つの視点で結果をまとめていきたい．

1 つ目の「運営団体」の視点では，文学館を運営する団体やそこで働いている職員について述べる．調査の結果，文学館の運営団体は，図 1 の通り，公益財団法人や一般財団法人といった法人が中心として運営を行う館が 44 館，県や市による運営が 50 館，個人による運営が 2 館，民間企業による運営が 5 館，その他に大学や有志団体といった特殊な例が 5 館であることがわかった．

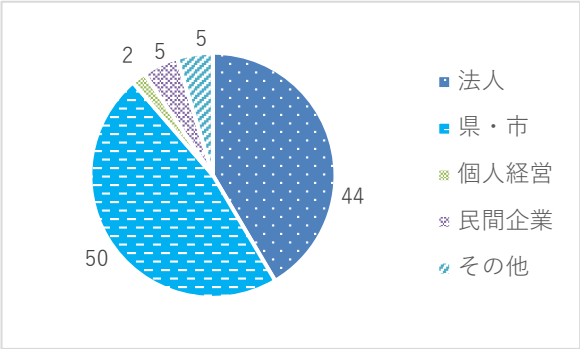

図 1　文学館の運営団体

なかでも，県や市の運営の中で文学館の運営を担当する部署は，文化振興や生涯学習を冠する部署，もしくは教育委員会が営んでいることが判明した．そのためか，表 1 の評価項目の 1 つである「館独自の HP」や「自治体の HP」を見ると，ほとんどの館が館独自の HP と共に自治体の HP にも情報を公開している傾向がみられた．その反面，館独自の HP を持たない文学館があるが，自治体の HP には情報を公開しており，多くの文学館が自治体と連携した運営を行っていることが明らかとなった．また，調査項目の中にある「学芸員の有無」に着目すると，76 館に文学を専門とする学芸員，もしくは学芸員に類する知識を持つ職員が常駐している．　他にも文学館で働く職員とは別に，有志の団体やボランティア団体が活動を行っている館も 58 館と半数見られた．

2 つ目の「デジタル上での活動」の視点では，文学館が公開しているデータベースとデジタルアーカイブの有無や SNS 利用の有無から，デジタル化による利活用の現状を述べる．1 段階目の評価項目である，「データベースの有無」と「デ

ジタルアーカイブの有無」を調査した結果，図２のような結果となった．

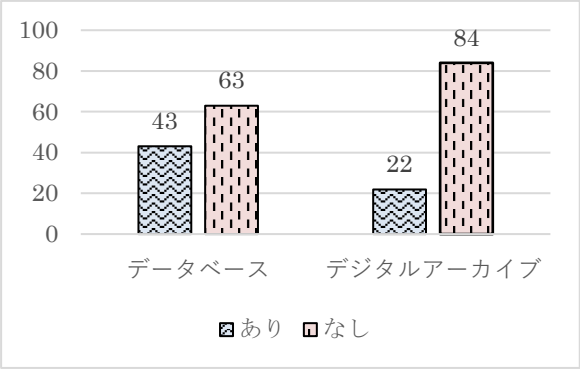

図２　データベースとデジタルアーカイブの有無

データベースやデジタルアーカイブを公開している文学館の数は 106 館中, データベースが 43 館，デジタルアーカイブに至っては 22 館と半数にも満たないことがわかった. データベースに関しては，岡野（2008）[1]が調査した当時よりも増加しているが, 現在のデジタル分野の現状に比べると遅れが目立つ結果となった. デジタルアーカイブはデータベース化が進んでいない影響や文学館が持つ資料の特殊性もあり, 公開できる館が限られていることが今回の調査で明らかになった. デジタルアーカイブを公開している文学館の特徴として，県や図書館，博物館，美術館といった自治体や代表的な文化施設と共同で製作されるか, 県の名前を冠するような規模の大きい文学館によって製作される傾向があった.

調査を進める中で, 文学館におけるデータベースとデジタルアーカイブの質の粗さを感じた. 通常, 図書館や博物館で公開されるデータベースやデジタルアーカイブは，OPAC のように作品・作者の名前や発行年，出版社など，特定の内容から詳細検索を行うことができるように情報を提供している．しかし，文学館のデータベースやデジタルアーカイブは, 図書館の OPAC のように所蔵情報を検索できた館は少なく, 各館が所蔵する作者・作品の所蔵のみを検索するものや所蔵資料の一部を紹介する形で検索するものなど, データベースとデジタルアーカイブの質に差があるように感じられた.

これまでの先行研究では, 文学館が公開するデータベースとデジタルアーカイブの数や図書館的機能に基づいた検索内容に着目した研究は多く見られたが, その性質や公開される傾向について言及はなかった．そのため，今回の調査によって文学館のデータベースとデジタルアーカイブの現状だけではなく, それぞれの検索システムの質の粗さという課題, デジタルアーカイブの公開が行われている館の傾向を明らかにすることができた.

その他，文学館の SNS 利用の有無について目を向けると 106 館中 79 館が SNS を利用していることがわかった. 使用しているツールとして多かったのは X（旧 Twitter）や Facebook，YouTube，Instagram だった．使用する用途としては X（旧 Twitter）や Facebook を通して館の広報やイベントに関する情報を発信し, YouTube では文学館のイベントや講演会などの記録を残こして公開する形をとっていることが多かった.

３つ目の「文学館独自の取り組み」の視点では，表１の評価項目の中にある「地域連携」の有無や「併設施設」の傾向と特徴を述べた上で，そこで行われている「館独自の取り組み」，「文学館独自の賞」，「出版物」の有無と種類といった，取り組みについて着目した結果を述べる.

まず，地域連携の有無を見ると，多くの館が地域の人々に向け, イベントや講演会を行っていることがわかった. この地域連携を行う場として文学館が持つ併設施設が多く活用されていた. 中でも多く見られたのはカフェやサロンといった休憩・交流を行うことができる場所だった. そして, 併設施設の中でも特徴的だったのは, 文学館が図書館と併設した場所に設置される傾向にあることである．特に，青森県近代文学館（青森県）[6]では青森県立図書館，池波正太郎記念文庫（東京都）[7]では台東区立中央図書館，小川未明文学館（新潟県）[8]では高田図書館（上越市立図書館），福井県ふるさと文学館（福井県）[9]では福井県立図書館と福井県文書館，菊池寛記念館（香川県）[10]では高松市中央図書館と高松市歴史資料館，福岡市文学館（福岡県）[11]では福岡市総合図書館，くまもと文学・歴史館（熊本県）[12]では熊本県立図書館というように図書館による運営，もしくは図書館との協働で運営が行われている文学館がみられた．また，資料の閲覧・検索が出来る場所として，ライブラリーコーナーや閲覧室，映像を視聴できる AV コーナーも設置されていた．この結果は文学館史で触れたように，文学館が図書館的機能を持つために出た結果であると考えられる. 他にも文学館内の自由な空間を貸し出すギャラリーやホール，庭園，文学館にゆかりのある作家の生家や書斎を併設している館がみられ, 文学館は図書館的機能や博物館的機能を発揮するためだけではなく, 生涯学習として交流の場を作る文化創造的な役割をも期待されていることが明瞭となった.

次に，「館独自の取り組み」，「文学館独自の賞」，「出版物」の有無と種類ついて述べる.「館独自の取り組み」では，文学館にゆかりのある作家の朗読会や決まった作家・時代を対象として講師を呼び, 講座を開く文学講座を行う館が圧倒的に多く, 地域の人々に向けてゆかりの作家を普及する活動が占められていた．併せて，顕著にみられた例として文学館の職員によるブログの発信や地域の子どもを対象として夏休みの読書感想

文の作成を援助する企画，文学館の HP 内で子ども・教育向けの調べ学習に役立つサイトを作成する，といった文学自体を普及する活動，その他，バックヤードツアーを通して文学館の利用を促す活動，作家の生誕や没後，文学忌などを通してその顕彰をたたえる活動がみられた．さらに，文学館が独自に取り組む特徴的な活動として，「文学館独自の賞」があり，全 106 館中 53 館と半数の館が取り組んでいる．賞を行う館の傾向として，小川未明文学館（新潟県）[8], 新美南吉記念館（愛知県）[13]などの児童文学をテーマにした館や松山市立子規記念博物館（愛媛県）[14]，公益財団法人斎藤茂吉記念館（山形県）[15]等の俳句・短歌・詩歌を扱う文学館において，独自の文学賞を設置している様子がみられた．他にも，新型コロナウイルス感染拡大の影響から誕生した，「おうちミュージアム」という企画が散見された．この企画は HP に特設ページを設け，文学館に所蔵されている作家の資料や文学館の沿革などを紹介した動画や写真を公開する取り組みである．このような，近年の情勢に合わせて情報を発信する新たな動きを発見することが出来た．

続いて，出版物について調査した結果を述べる．出版物の有無や種類の調査では，研究材料として使用される資料はどの程度発行されているのか把握するため，図録や書籍などは「一般への普及」，紀要・資料集・目録などは「研究利用」に使用されるものとして評価を行った．その結果，全体の 106 館中 92 館が出版物を発行しており，その中でも図録や書籍などの一般への普及を想定した出版物のみを発行している館が 52 館，紀要・資料集・目録などの「研究利用」を想定した出版物も一緒に発行している館が 40 館であることが判明した．ほとんどの館で出版物が発行されているが，その用途として想定されているのは一般への普及，次いで研究利用となっていることが明白になった．

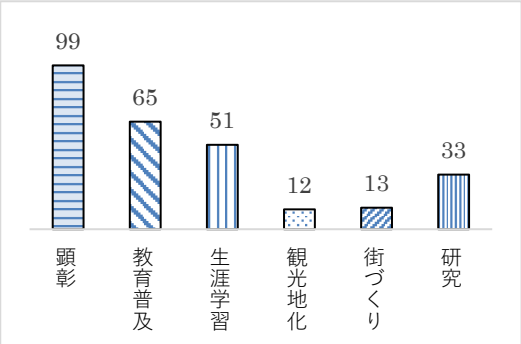

図３　目的別の文学館の館数

次に，２段階目の調査でわかったことについて，目的別にみた文学館の現状を述べていきたい．図３の通り，文学館が持つ目的で多くを占めていたのは，「顕彰」と「教育普及」であることがわかった．

特に，「教育普及」は児童文学をテーマに扱う館，地域の若い世代に向けてゆかりとする作家を広めるという意図が強い館が目的としている傾向にある．また，「教育普及」に付随する形で「生涯学習」の機能を持った館が多く見られた．特に，図書館と併設する形で運営が行われている館や，ギャラリー，庭，カフェ，閲覧室といった併設施設を通して，コンサートなどのイベント，展覧会・コンクールを開催する生涯学習の「場」として利用できるようにしている館は「教育普及」と「生涯学習」の両方の機能を持つと思われる．

「研究」については，研究を明示的に目的として掲げている館はわずかであることがわかった．文学館の運営団体や活動の面から見て，専門図書館や博物館的機能を通して研究施設としての役割を持つ文学館の在り方は少なかった．特徴として，県の名前が付くような大規模な文学館，もしくは石川県金沢市や愛媛県松山市のように，街全体で文学普及を行うような所にある文学館に機能が備わっているということがわかった．

「観光地化」や「街づくり」は６つの分類の中で少数ではあるが，県や市による文化振興，博物館，美術館といった文化施設と深く結びつき，地域の歴史や文化を普及させる事業としての役割を果たしていることが今回の調査で判明した．

５．おわりに

本研究において，全国文学館協議会に所属している文学館の活動からデジタル化について考察する中で，文学館の現在の在り方やその中で見える課題を明らかにした．

まず，１段階目の調査からは，文学館は自治体と強い繋がりがあり，「併設施設」や「文学館独自の取り組み」からも伺えるように，ゆかりの作家，ひいては文学を普及するための場としての機能が期待されていることがわかった．このような結果がみられたのは，文学館を運営している団体に関係があると考えられる．１段階目の調査結果の中でも述べたように，文学館の運営は，公益財団法人や一般財団法人のような法人が中心として運営している館よりも県や市による運営が多く，その中でも文学館の管理・運営を担当する部署は，文化振興や生涯学習を冠する部署，もしくは教育委員会が営んでいる傾向にある．そのため，活動の内容に社会教育や生涯学習の色が濃く表れたのではないかと考えられる．現在の文学館の活動は，文学館に関する先行研究で挙げられていたような，研究者を対象とする当初の機能の活かし方よりも，一般に向けた文学の普及や人と人とをつなげる文化創造としての場，情報発信を図るための機能の活かし方に重きを置いていることが明瞭となった．

次に，２段階目の調査から，文学館は「顕彰」や「教育普及」，「生涯学習」を目的とした活動を主に行っていることがわかった．他にも，県や市

が地域の歴史と文化を普及させるための施設として「観光地化」や「街づくり」の役割も期待していることが判明した．文学館の在り方は時代や求められる環境に合わせて変容していることを２段階目から伺うことができる．

これらの結果を踏まえて，文学館のデジタル化の状況と課題に目を向けると，　データベースやデジタルアーカイブの構築・公開といったシステム的な活動はあまり見られず，検索システムの質の粗さにも課題があることがわかった．人文学でもデジタル化による利活用が叫ばれる現在において，文学館の現状はその波に遅れているような印象が見受けられる．

また，調査を進めた中で，筆者が感じたことは文学館に合った情報提供の在り方を模索する必要性と文学館同士のシステム的な連携の不足である．文学館に合った情報提供の在り方とは，文学館に所蔵されている文学資料の特殊性を理解した上で，一律に資料を検索し，情報を提供することのできるシステムの在り方のことである．

現在の文学館の検索システムは個々の文学館によって異なった特徴を持つが，文学館全体から資料を横断的に検索できる一般化されたシステムの在り方は追及されておらず，閉鎖的な状態であるように思われる．岡野は文学館の検索システムの課題について「個々の文学館同士を比較しながら一般化できる共通項を見出し，そこから図書館とは異なる文学館の独自性を追求していく必要はあるだろう．」と述べている．

この指摘のように，文学館のデジタル化における課題を解決するために必要な糸口は，文学館が持つ独自性を体系立て文学館同士を結びつけることのできる共通項を見出すことであると考える．併せて重要な点として，文学資料同士の繋がりを反映したシステム構築の必要性を提唱したい．今回の調査で確認することができたデータベースとデジタルアーカイブを見ると，文学館ごとに所蔵資料を検索するものが多くみられた．しかし，こうした検索システムの在り方では，各館が持つ同一作家の文学資料を一律に把握することはできず，作家同士の交友関係や文学的な思潮といった各館で保存される文学資料同士の繋がりを反映した調査や検索を行うことが困難な状態のままである．散逸した日本近代文学資料の所在を明らかにし，作家の軌跡を辿る上で，文学館が持つ文学資料は資料の繋がりを反映させ，利用に供することのできる唯一の場であり，様々な目的や機能を持つ文学館の在り方を追求するための新たな視点になりうると思われる．そのためにも文学館同士のシステム的な連携は必要不可欠である．

文学館が持つ文学資料は日本文学の本質を知る上で有用なものである．だからこそ，文学館が持つ多様な機能を活かした取り組み，そして文学館と文学資料同士を繋げる新たなシステムの在り方を模索することが急務であると考える．

参考文献

[1] 岡野裕行：文学館の検索システムの現状と課題, 情報メディア研究, Vol.7, No.1, pp.41-61(オンライン), DOI：https://doi.org/10.11304/jims.7.41 (2008).

[2] 小国七慧：文学館の「図書館的機能」の形態の整理および文学館の分類に関する一考察, 國學院大學大学院紀要：文学研究科, Vol.52, pp.175-194(オンライン), DOI：http://doi.org/10.57529/00001515 (2021).

[3] 全国文学館協議会：全国文学館協議会, 全国文学館協議会(オンライン), 入手先<https://zenbunkyo.com/>(参照 2023-8-30).

[4] 橋口里奈：アーカイブズとしての文学館, 国文学研究資料館紀要　アーカイブズ研究篇, Vol.53,No.18, pp.133-147(オンライン), DOI：http://doi.org/10.24619/00004466 (2022).

[5] 岡野裕行：文学館研究の転換期―全国文学館協議会の発足と文献数・文献内容の変化―, 日本図書館情報学会誌, Vol.54, No.4, pp.270-287(オンライン), DOI：https://doi.org/10.20651/jslis.54.4_270 (2008).

[6] 青森県近代文学館：青森県近代文学館,青森県立図書館 (オンライン), 入手先<https://www.plib.pref.aomori.lg.jp> (参照 2023-10-28).

[7] 池波正太郎記念文庫：池波正太郎記念文庫, 台東区立中央図書館(オンライン), 入手先<https://library.city.taito.lg.jp/ikenami/>(参照 2023-10-28).

[8] 小川未明文学館：小川未明文学館, 上越市(オンライン), 入手先<https://www.city.joetsu.niigata.jp/site/mimei-bungakukan/>(参照 2023-10-28).

[9] 福井県ふるさと文学館：福井県ふるさと文学館, 福井県(オンライン), 入手先< https://www.library-archives.pref.fukui.lg.jp/>(参照 2023-10-28).

[10] 菊池寛記念館：菊池寛記念館, 高松市(オンライン), 入手先<https://www.city.takamatsu.kagawa.jp/kurashi/kosodate/bunka/kikuchikan/index.html>(参照 2023-10-28).

[11] 福岡市文学館：福岡市文学館, 福岡市文学館(オンライン), 入手先<https://fukuokabungakukan.com/>(参照 2023-10-28).

[12] くまもと文学・歴史館：くまもと文学・歴史館, 熊本県立図書館(オンライン), 入手先<https://www2.library.pref.kumamoto.jp/>(参照 2023-10-28).

[13] 新美南吉記念館：新美南吉記念館, 新美南吉記念館(オンライン), 入手先<http://www.nankichi.gr.jp/>(参照 2023-10-30).

[14] 松山市立子規記念博物館：松山市立子規記念博物館, 松山市立子規記念博物館(オンライン), 入手先<https://shiki-museum.com>(参照 2023-10-30).

[15] 公益財団法人斎藤茂吉記念館：公益財団法人斎藤茂吉記念館, 公益財団法人斎藤茂吉記念館(オンライン), 入手先< https://www.mokichi.or.jp/>(参照 2023-10-30).